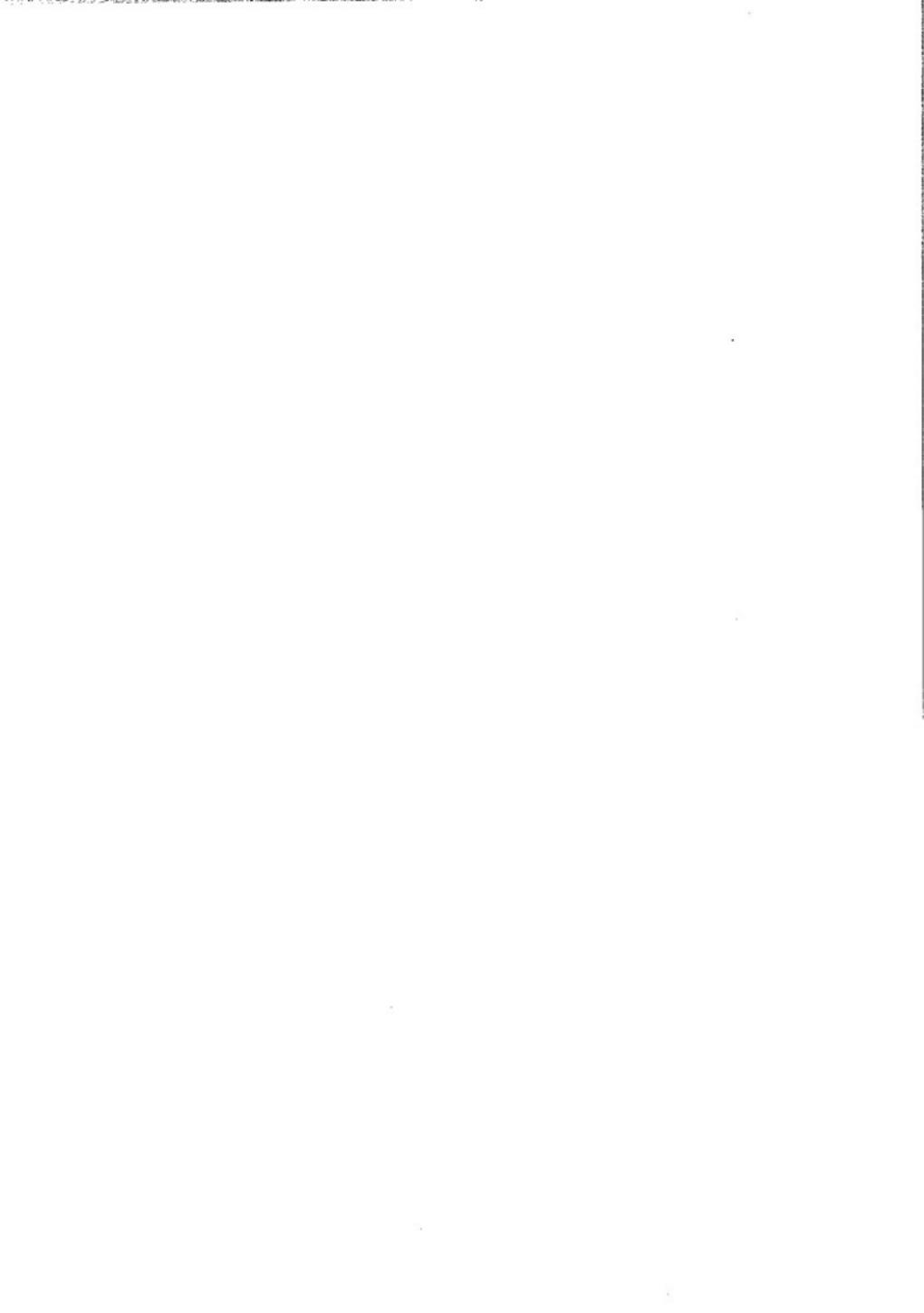


# 余 部 遺 跡 Ⅲ

2004年3月

大阪府教育委員会



# 余 部 遺 跡 Ⅲ

2004年3月

大阪府教育委員会

## はしがき

余部遺跡は、南河内郡美原町にある古墳時代から近世にいたる複合遺跡です。現在までの発掘調査で13世紀を中心とする鋳造関連遺物が多数発見され、河内鋳物師集団の本拠地として、全国的に知られています。

大阪府教育委員会では、府営美原南余部住宅道路整備工事に先立ちまして、平成14年度に発掘調査を実施しました。その結果、鎌倉時代の牛車の轍・土坑などの遺構とともに、土製鋳型・フイゴ羽口・鉄塊などの鋳造関連遺物が出土しました。これらの遺構・遺物は、当地域の歴史に留まらず、日本の中世史を解明していく上で、かけがえのない貴重な資料になるものと確信されます。

最後に、発掘調査の実施にご協力いただきました地元の皆様並びに関係機関に深く感謝いたしますとともに、今後とも本府文化財保護行政へのご理解とご協力を賜りますよう御願い申し上げます。

平成16年3月

大阪府教育委員会事務局

文化財保護課長 向井正博

## 例　　言

1. 本書は、府営美原南余部住宅道路整備工事に伴い実施した美原町南余部に所在する余部遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、大阪府建築都市部から依頼を受け、大阪府教育委員会が実施した。発掘調査は、平成14年度に調査第二グループ主査 西口陽一を担当者として実施した。整理作業は平成15年度に、調査管理グループ技師 林日佐子・小浜成を担当者として実施した。
3. 本調査の航空写真測量は、朝日航洋株式会社に委託した。撮影フィルムは、同社で保管している。
4. 本調査で出土した遺物の写真撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
5. 調査に際しては、地元自治会、美原町教育委員会、大阪府建築都市部住宅整備課をはじめ多くの方に御指導、御助言をいただいた。ここに記して感謝いたします。
6. 本書の執筆・編集は西口が行った。
7. 調査、遺物整理、報告書作成に要した経費は、すべて大阪府建築都市部が負担した。
8. 本書は300部作成し、一冊当たりの単価は914円である。

## 凡　　例

1. 本書に用いた標高はすべてT.P.（東京湾標準潮位）による。座標値は、国土座標第VI系によるもので、方位は座標北を示す。
2. 本書に用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄編著「新版標準土色帖19版」1997.1を使用した。

## 本　文　目　次

### はしがき

### 例言・凡例

### 目　　次

第1章	調査に至る経過	1
第2章	遺跡の位置と環境	1
第3章	調査結果	3
第1節	調査方法	3

第2節 各地区的遺構と遺物	3
<1区>	
<2区>	
<3区>	
<4区>	
<5区>	
<6区>	
<倣>	
第4章　まとめ	18

## 挿図目次

第1図　周辺遺跡分布図	2
第2図　明治18年板製地図による調査区位置図	3
第3図　調査区位置図	4
第4図　1区遺構平面図	5
第5図　1区北端遺構平面図	6
第6図　2区・3区遺構平面図	8
第7図　4区遺構平面図	10
第8図　4区土坑平面図・断面図	11
第9図　5区・6区遺構平面図	12
第10図　5区南端遺構平面図・断面図	13
第11図　出土土器・埴輪・瓦実測図	14
第12図　出土石器実測図	15
第13図　出土土製鋳型・鉄塊実測図	16

## 表目次

第1表　出土遺物一覧表	17
-------------	----

## 図 版 目 次

図版1 調査区全景	a, 調査区遠景（東上空から） b, 調査区全景（北上空から）
図版2 調査区全景	a, 1区南半部全景（下が北） b, 1区北半部全景（下が北）
図版3 調査区全景	a, 2区・3区全景（上が東） b, 4区全景（右が東）
図版4 調査区全景	a, 5区全景（上が東） b, 5区・6区全景（上が東）
図版5 1区遺構	a, 1区轍検出状況（南から） b, 1区轍・牛の足跡検出状況（西から）
図版6 1区全景	a, 1区南半部全景（北から） b, 1区北半部全景（南から）
図版7 1区全景	a, 1区北端全景（南から） b, 1区北端全景（北から）
図版8 1区遺構	a, 1区井戸検出状況（南西から） b, 1区井戸全景（西から）
図版9 2区・3区全景	a, 2区全景（北から） b, 3区全景（東から）
図版10 3区・4区全景	a, 3区轍・土坑検出状況（南西から） b, 4区全景（南西から）
図版11 4区遺構	a, 4区西端轍・土坑・ピット検出状況（南から） b, 4区西端土坑（東から）
図版12 5区遺構	a, 5区轍・ピット検出状況（西から） b, 5区東端土坑・ピット・轍検出状況（南から）
図版13 5区遺構	a, 5区全景（南西から） b, 5区轍・ピット（西から）
図版14 5区遺構	a, 5区西端轍・ピット（東から） b, 5区東端・6区土坑・ピット（北西から）
図版15 5区遺構	a, 5区南壁断面（北東から） b, 5区南壁断面（北西から）
図版16 各区遺構・包含層出土遺物	a, 1区井戸。土師器壺（1）・高杯（2）。4区土坑。土師器杯（3）。5区轍。円筒埴輪（4）（1/1）

b, 各区包含層。翼状剥片 (5)、サヌカイト剥片 (6~9)、フイゴ羽口 (10·11)、鉄塊 (12)、鋳型 (13)、製塩土器 (14) (1/1)

図版17 1区包含層出土遺物

a, 1区包含層。布留式壺 (15)、土師器高杯 (16) ·杯 (17) ·羽釜 (18)、黒色土器椀 (19)、東播壺 (20) (4/5)

b, 1区包含層。須恵器壺 (21~23) ·杯 (24·25) ·壺 (26)、平瓦 (27) (2/3)

図版18 2区・3区包含層出土遺物 a, 2区包含層。須恵器壺 (28) ·東播ねり鉢 (29)、土師器壺 (30) ·すり鉢 (31)、瓦質羽釜 (32)、平瓦 (33) (4/5)

b, 3区包含層。須恵器杯 (34)、土師器杯 (35·36) ·小皿 (37~40) (1/1)

図版19 3区・4区包含層出土遺物 a, 3区包含層。須恵器鉢 (41) ·杯 (42) ·壺 (43·44)、土師器鉢 (45) ·羽釜 (46)、瓦質羽釜 (47)、平瓦 (48·49) (2/3)

b, 4区包含層。須恵器提瓶 (50)、白磁碗 (51)、青磁碗 (52)、東播ねり鉢 (53)、瓦器小皿 (54)、土師器羽釜 (55)、鍋 (56) (4/5)

図版20 5区・6区包含層出土遺物 a, 5区包含層。土師器高杯 (57)、円筒埴輪 (58)、東播ねり鉢 (59)、土師器すり鉢 (59)、須恵器すり鉢 (61) (2/3)

b, 6区包含層。須恵器壺 (62)、瓦器椀 (63~65) ·小皿 (66)、土師器羽釜 (67)、瓦質鉢 (68) (1/1)

## 第1章 調査に至る経過

本発掘調査は、大阪府教育委員会が大阪府建築都市部からの依頼を受け、平成14年度に美原町南余部地内で実施したものである。

調査原因の「道路整備工事」とは、既存道路の拡幅及び道路の新設を目的とし、平成15年に実施する計画の工事である。工事の実施に先立って、事業主体である大阪府建築都市部住宅整備課と大阪府教育委員会文化財保護課は、埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、工事区域の確認調査を実施することとした。平成14年5月に行われた確認調査では、設定した9箇所の調査区のうち、トレンチ6・8・9の3箇所で層厚約35cmの中世遺物包含層を検出し、さらに9トレンチでは柱穴跡を確認した。

その結果をもとに協議がもたれ、「上記の3カ所のトレンチに接する事業区域の南半部については、事前に本発掘調査を実施する必要がある、その他の区域については、慎重に工事を実施し、遺構・遺物が発見された場合には、速やかに本府教育委員会文化財保護課まで連絡されたい」とする措置が決まった。

## 第2章 遺跡の位置と環境

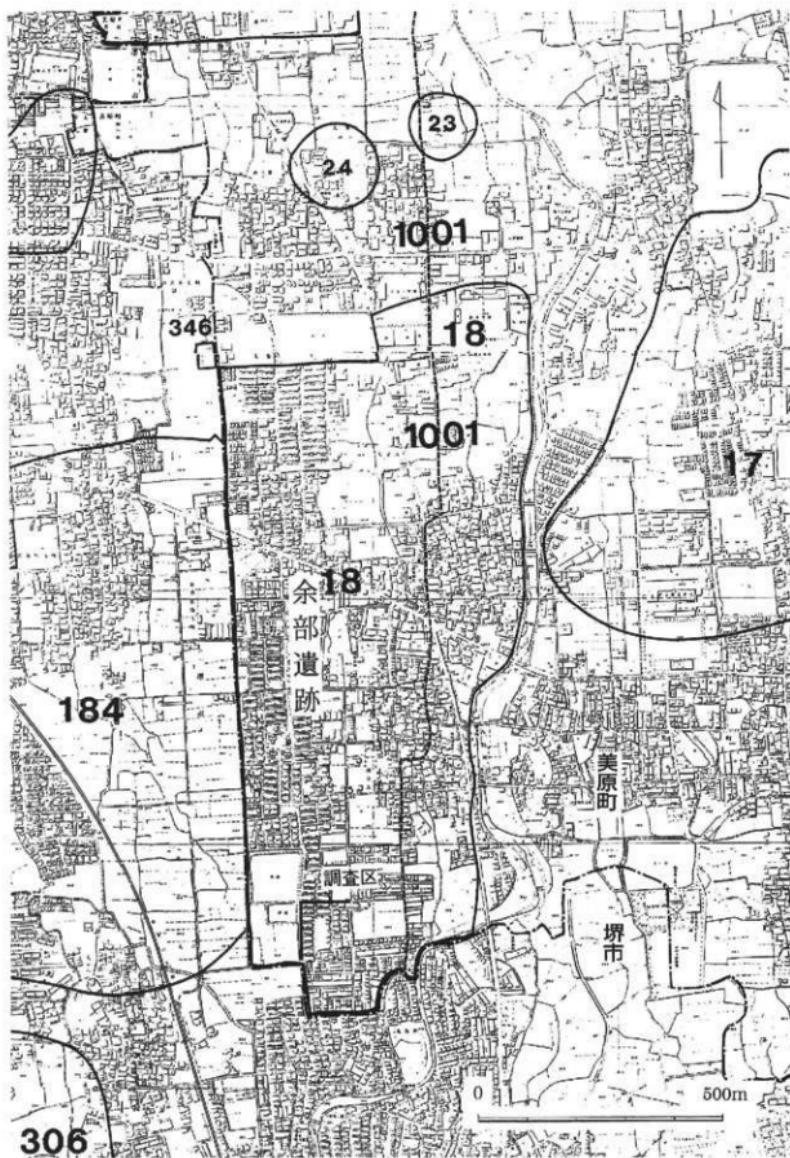
余部遺跡（第1図18）は、大阪府南河内郡美原町南余部・北余部に所在する。標高は、41～43mで、遺跡の東側を流れる西除川によって作られたなだらかな中位段丘上にある。周囲は、近年に至るまでは一面の水田であった（第2図）。遺跡の中央には、7世紀の茅渟道を部分的に踏襲していると考えられる府道堺富田林線があり、南北には、下高野街道（1001）がある。余部遺跡の範囲は、昭和61年度の大坂府教育委員会による発掘調査以降の調査の結果、東西500m、南北1.5kmと判明している。

遺跡の時期は、古墳時代後期に始まり、奈良時代の遺物も出土しているが、中心となるのは中世のものである。磐の鋳型や鉄瓶等の鋳造関連の遺物が多く出土し、河内鋳物師の本拠地として広く認識されている。

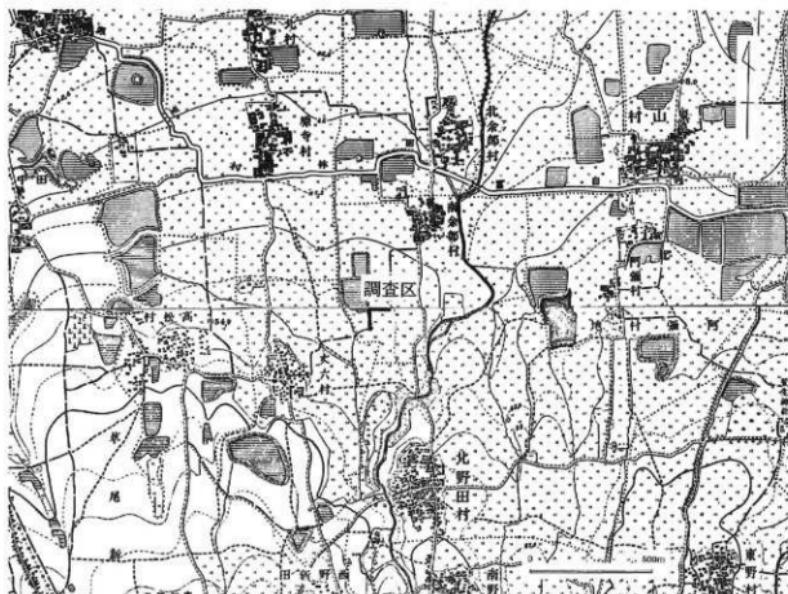
余部遺跡の周辺には、西に接して堺市日置荘遺跡（184）がある。阪和自動車道の建設の際の調査で、中世の炉壁やスラグ・鋳型などの鋳造関連遺物が出土し、余部遺跡と一連のものと考えられている（註1）。

余部遺跡の東には、西除川を挟んで、太井遺跡（17）がある。飛鳥～奈良時代の建物群とそれに伴って鋳造工房が発見されていて、「河内鋳銭司」との関連も指摘されている（註2）。

余部遺跡の北側には、瓦が出土した平安時代の八坂神社遺跡（23）、南北朝の城岸寺城跡（24）などが発見されている。



第1図 周辺遺跡分布図（18・余部遺跡、17・太井遺跡、23・八坂神社遺跡、24・城岸寺城跡、  
1001・下高野街道、184・日置莊遺跡、346・日置莊東池遺跡、306・丈六大池遺跡）



第2図 明治18年仮製地図による調査区位置図

(註1) 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター「口置荘遺跡」、1995年3月

(註2) 大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財調査研究センター「太井遺跡」、1996年3月

### 第3章 調査結果

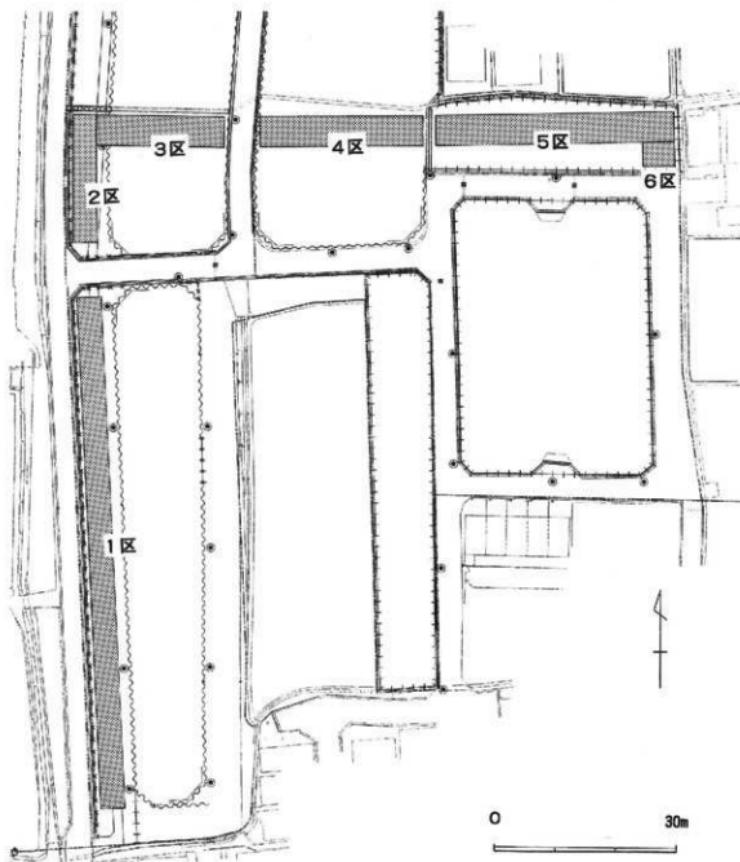
#### 第1節 調査方法

平成14年5月の確認調査の結果をうけた協議で、道路新設部分と町道拡幅部分の発掘調査が決まった。町道拡幅のためには、仮歩道の付け替え工事が必要であった。また、現道・水路部分は、調査ができなかったため、調査区は6区に細分された（第3図）。1区は、幅4m長さ84m、2区は、幅4m長さ21m、3区は、幅5m長さ21m、4区は、幅5m長さ39m、6区は、幅4m長さ5mで、総調査面積は、875m<sup>2</sup>であった。確認調査の成果をうけて、機械掘削は地表下50cmまで、人力掘削は、その下30cmとした。人力掘削が終わった段階で、ヘリによる写真測量を行った。

#### 第2節 各地区的遺構と遺物

《1区》 1区は、南北方向に伸びる長さ84mの長い調査区である（図版2）。調査区の南と北

では、現地表面で比高差45cmある。南が高く、北が低くなっている。府営住宅建造時の盛土（黄褐色粗砂層）が10~20cmある。その下に、近世～近代の染付け茶碗等を含む旧耕土層がある。この耕土層は、平均すると厚さ12~15cmあり、その下にある厚さ3~5cmの床土層（酸化鉄の沈積のため黄褐色になっている）と共に水平に堆積しているが、調査区内にあっては、調査区南端から34mと73mの部分でそれぞれ北側に段となって落ち込んでいた。それぞれ段の端には畦畔がある、水が下の田に落ちないように工夫されている。調査区の南端と北端では、この耕土層の下面に於いて、57cmの比高差がある。この57cmの比高差を2つの段で処理している訳である。この耕土・床土層の下に調査区の南端では27cm、北端でも27cmの厚さの中世土器を包含する層がある（灰色～灰黄色の粘質土層）。この遺物包含層には、間層として2~3枚の黄褐色粘質土層がそれ

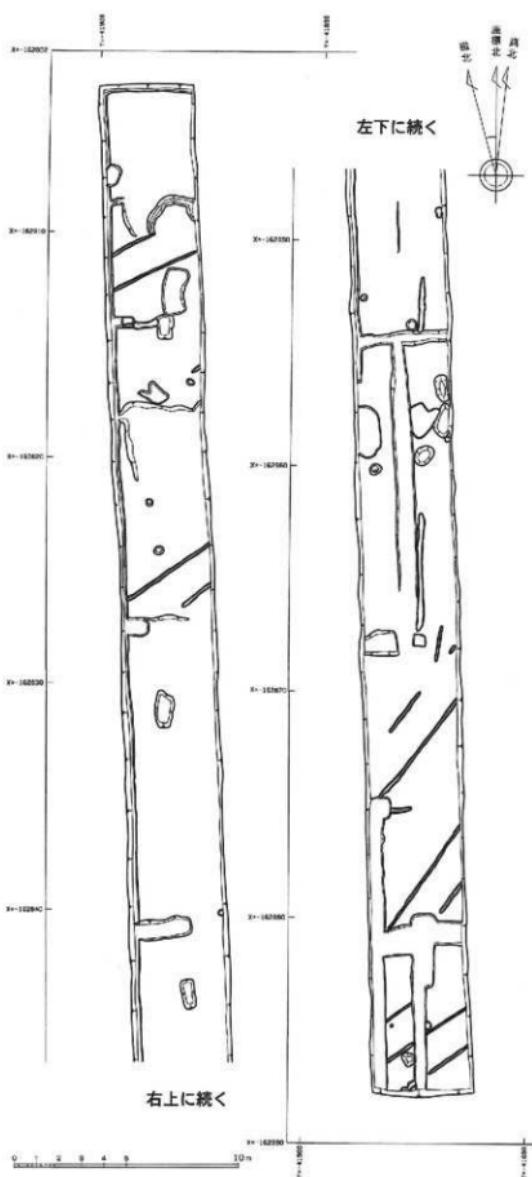


第3図 調査区位置図

それ厚さ2~4cmで水平に堆積している。酸化鉄の沈積が認められることから、中世の各時期の水田の存在が分かる。この水田層は、上層から下層に至るまで、同様な粘質土が堆積し続けていることから、中世から近世にかけて、安定した水田耕作がなされ続けていたものと考えられた。

この水田層の下に、調査区全域に厚さ2~5cmの暗茶色をした粘質土層が堆積している。灰色や茶褐色粘土のブロックが混ざっていて、瓦器や土師器等の細片が含まれていて、鎌倉時代の整地土層と考えられた。この層の下に轍や土坑・ピットなどの遺構面が検出された。この遺構面は、調査区の南端と北端で60cmの勾配が認められ、南から北に徐々に低くなっていた。

整地層の下から検出された遺構としては、調査区南端から3m、10m、18m、62m、77mの位置にそれぞれ轍がある(第4図)。方向は、いずれも南西から北東にかけてで、重なりも認められず、それぞれ1回のみの通行による直線的な



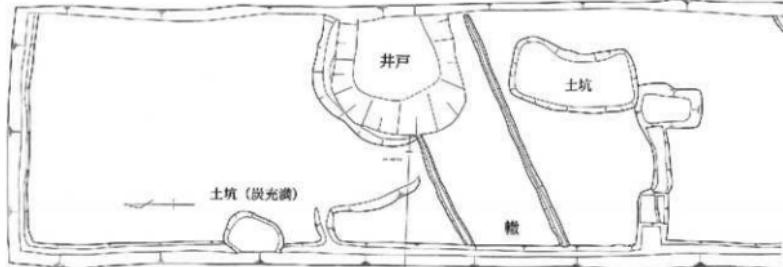
第4図 1区遺構平面図

轍である（図版5a）。調査区南端から18m、62mの位置で検出された轍の幅が芯芯で150cmで、他は145cmである。調査区南端から3m、10m、18mの位置で検出された轍の周囲には、多数の牛の足跡が大小の不整形なピットと共に残存していた（図版5b）。轍の埋土から遺物は出土せず、轍の直接的な時期は不明である。

調査区南端から20～25mの位置で、南北方向の鋤溝や土坑群が検出された（図版6a）。鋤溝は、幅25cm、深さ5cm位のもので、埋土は暗茶褐色の粘土層であった。土坑群は、大小不揃いな土坑が固まって検出されたもので、大きな土坑2基（長さ160cmと長さ220cm）は、深さ6～7cmと浅く、中規模な土坑3基（長さ100、120、140cm）は、深さ28～35cmと深かった。小規模な土坑2基（長さ50cm）は、深さ10～20cmであった。いずれも埋土は、暗茶褐色の粘質土で、無遺物であった。平面形も梢円形や不整形なものばかりで、土坑墓になるものか、性格は不明であった。他に、ピットも2つ検出されたが、無遺物であった。

調査区南端から65mの位置で、南北に180cm離れて径30cmと38cmの梢円形ピットが2つ検出された。深さ20～22cmのものだが、埋土は暗茶褐色の粘質土で、遺物は出土せず、性格も不明であった（図版7a）。

調査区南端から70～80mの位置で、土坑・溝・ピットなどが固まって検出された（図版7b）。土坑やピットは不整形なもので、暗茶褐色の粘質土が落ち込んでいたが、遺物は出土せず、性格も不明である。ただ、調査区北端で検出された溝は、長さ2.2mにわたって半円形に歪んで検出されたもので、東端では、その幅が1.5m以上に広がっていた。この溝は、鎌倉時代と推定される轍によって、その南端が切られていることにより、鎌倉時代以前のものであることは明らかであった。その後の調査によって、この溝は、井戸の埋土の周縁部を溝と誤認したものであることが判明した（図版8a）。この井戸は、調査区内に全体の3/4ほどが検出されたものである。残り1/4は、トレンチ東側に伸びていた。井戸の平面形は、隅丸方形気味の梢円形で、素掘りであった。枠などは残っていなかった。底は、なだらかなもので、砂礫層を掘りくぼめているため、常に激しく湧水があった（図版8b）。埋土最下層は、厚さ8cmほどの黄褐色砂質土と黒色砂質土



第5図 1区北端遺構平面図（縮尺40分の1）

の混じった層であった。その上に、厚さ23cmほどの黒色粘質土が堆積していて、同層は固く締まっていた。同層中から、古墳時代前期の土師器高杯片が出土した。布留式の脚台が挿入される高杯で、他に小型丸底壺の破片や土師器細片2点が出土した（図版16a）。その上には、厚さ20cmの暗灰色～灰色～暗青灰色の粘質土が落ち込んだように堆積していたが、無遺物であった。これによって、この井戸は、古墳時代前期以降、轍の鎌倉時代以前のものと判断された。

また、この井戸から2m北西に離れた位置で検出された土坑は、長さ1m幅65cm深さ25cmの平面形は卵形を呈するものであるが、埋土に大量の炭片を含み、真っ黒であった。遺物は出土せず、性格も不明である（第5図）。

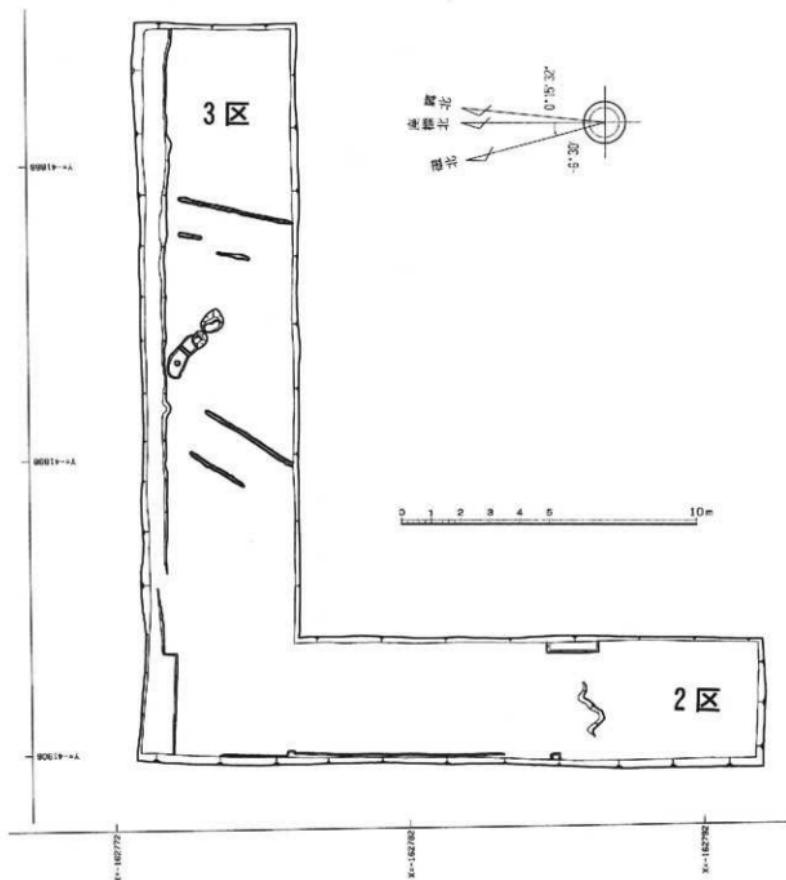
なお、調査区南端から50m～60mの位置で、地山である茶褐色砂礫層上に、部分的に暗茶褐色粘質土が落ち込んでおり、焼け土や炭片と共に、奈良時代の須恵器や土師器の破片などが少量出土した。近くに、その時代の集落跡の存在することが推定された。

中世遺物包含層に含まれている遺物には、旧石器時代のサスカイト剝片、古墳時代前期（布留式）壺・高杯、古墳時代後期の須恵器杯・台付き壺・壺、奈良時代の須恵器杯・壺・壺・製塙土器・平瓦、平安時代の土師器椀、平安～鎌倉時代の瓦器椀・小皿、土師器椀・羽釜・鍋・壺、東播須恵器ねり鉢・壺などがあった（計127点）。

特記すべき遺物としては、排土中であったが、土製鋳型片（2.7×2.4×1.7cm）があった。細片のため、全形は不明だが、石英混じりの茶褐色胎土の焼き物で、面取りされた3面が赤褐色～暗灰色～灰色に著しく焼けていた。

《2区》 2区は南北方向に伸びる長さ21mの調査区である（図版3a）。2区の北端は、3区南端と接している。府営住宅建築時の盛土は、平均で約20cmである。その下にある近世～近代の旧耕土層や床土層は、ほぼ水平に堆積している。旧耕土層は、東西および南北方向共に畝の断面が多く認められる点が特徴的である。床土層の下に、厚さ30～40cmの遺物包含層がある。同層中には、間層として2・3枚の酸化鉄の沈積層がある。出土土器が、いずれも細片（瓦器椀・土師器小皿・羽釜など）のため、詳細な各時期の年代決定はできないが、瓦器や土師器などの中世以外の土器が出土していないことから、ほぼ中世以降近世までのものと推定できる。この中世遺物包含層の下に、マンガン鉱を多く含んだ厚さ4～9cmの暗灰褐色粘土層がある。この層は、灰色粘土や黄色粘土がブロック状に混じることから中世の整地土層と考えられるが、2区南端から北に4mの箇所には存在してなかった。2区南端から4m北の部分は、地山が固い砂礫で2区北端と比べると、10cmも地山面が高かった。高いために整地層が置かれていたことが想定された。

2区南端から11m北の部分以北では、でこぼこした砂礫の地山上に厚さ8～10cmもの厚さの黄褐色粘土が堆積していた。この粘土層からは、奈良時代の土師器杯片他が出土し、奈良時代の遺物包含層であることが判明した（図版9a）。地山である茶褐色砂礫層上にも部分的に土師器細片が出土し、遺構は検出されなかつたが、近くにその時代の人々が生活していたことが推定された。



第6図 2区・3区遺構平面図

中世遺物包含層に含まれている遺物には、古墳時代後期の須恵器杯・壺、奈良時代の須恵器壺・壺・土師器杯、鎌倉時代の瓦器椀、土師器羽釜・壺・鍋、瓦質壺、東播須恵器ねり鉢、南北朝～室町時代の瓦質羽釜・壺・壺・平瓦などがあった（計59点）。

特記すべき遺物としては、フイゴ羽口片が1点あった。

《3区》 3区は、東西方向に伸びる長さ21mの調査区である（図版3 a）。府営住宅建造時の盛土の厚さは、平均約15cmと薄い。その下にある近世～近代の旧耕土層や床土層は、ほぼ水平に堆積していて、大きな畦や水路状のものもない。床土層の下に、30～40cmの厚さの中世土器包含層があった。瓦器や土師器片などが含まれていた。灰褐色～灰黃褐色の層中には、酸化鉄の沈

積した2層の黄褐色粘土層があり（厚さ2~10cm）、中世から近世にかけての時期の水田包含層と考えられた。掘削途中においては、東西方向の鋤溝が多数存在することが確認された。中世遺物包含層の下にマンガン粒を多く含んだ厚さ10cmまでの暗灰褐色粘土層がある。同層中には、黄色粘土もブロック状にふくまれていて、中世土器も含まれていることにより、中世の時期の整地土層と考えられた。その層の下に、3区西端より5mの箇所に、南西から北東にかけての方向に2本の轍が発見された（図版9b）。轍の幅は、150cmで、2本が平行することから1台の牛車の通った跡と考えられた。同様な轍は、3区西端より15mの箇所でも発見された。こちらの轍の幅も150cmで、南北に走っていた。2つの轍の周囲には、牛の足跡も多数残っていた。北側に隣接する4区に比べ、地山である黄褐色粘土層が固かったためか、轍の残っている数は少なかった（第6図）。

3区西端から東に9~11mの箇所で、2基の土坑が接して検出された（図版10a）。北側の土坑2は、長さ80cm、幅66cm、深さ30cm、平面形は、歪んだ楕円形である。底は、西側のみが深くなっていて、埋土は灰色粘質土であった。炭の細片を含んでいたが、遺物は出土しなかった。その西側の土坑3は、長さ188cm、幅は中央で50cm、深さは10cmと浅かった。平面形は、細長い楕円形で西側に曲がっていた。埋土は、灰色粘土と黄褐色粘土などがブロック状に固まって放り込まれたような状況で、人によって埋め戻された土であることが明らかであった。底は、ほぼ平らだったが、東側のみが深くなっていた。土坑の北西側の底に、径16cmの小穴が底から深さ6cm分掘られていた。また、土坑の南東端には、径50cmの円形の穴が深さ46cm分掘られていた。内部には、固い灰色粘土と黒い炭片が少量含まれているのみで、遺物は出土しなかったため、時期は不明である。

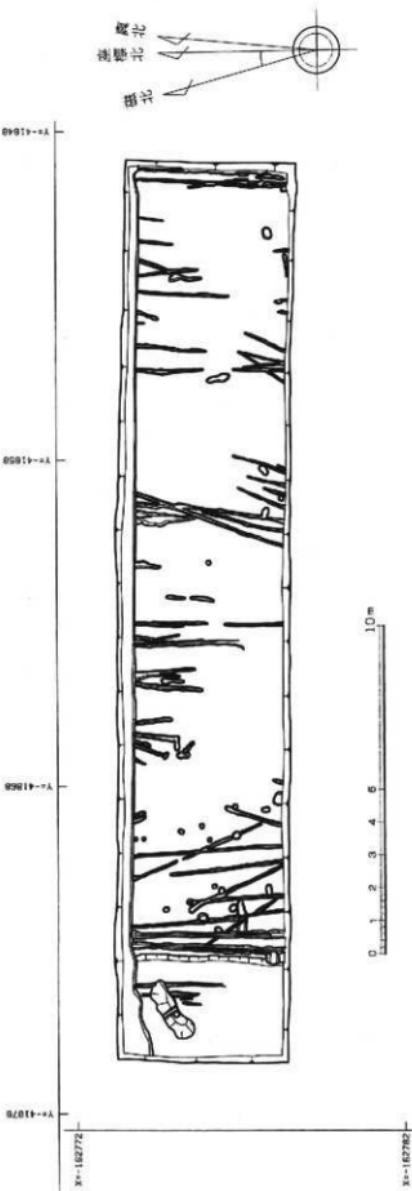
中世遺物包含層に含まれている遺物には、旧石器時代の翼状剥片（サヌカイト）、古墳時代後期の須恵器杯・壺、奈良時代の土師器杯、平安時代の内黒土師器碗、鎌倉時代の瓦器碗・小皿、土師器羽釜・小皿、東播須恵器ねり鉢・瓦質羽釜・半瓦などがあった（計143点）。

特記すべき遺物としては、鉄塊1点、フイゴ羽口1点があった。

《4区》 4区は、東西方向に伸びる長さ27mの調査区である（図版3b）。近世～近代と推定される旧の耕土層上に、平均厚さ30cmほどの新盛土（黄褐色粘土層）がある。その下に床土層があり、酸化鉄の沈積が認められた。その下に、厚さ平均約30cmほどの中世遺物包含層がある。茶褐色～灰褐色をした同層中には、2~3枚の酸化鉄の沈積層があり、各々時期を越えた水田耕土層と考えられた。同層中からは、瓦器碗や土師器小皿・羽釜などの細片が出土している。また、同層の各面には、東西方向の鋤溝が多数検出されている。

その下に、厚さ5~8cmほどの暗灰褐色粘質土層が堆積している。この層中には、黒マンガン粒が多く含まれ、中世土器片も包含されていた。黄色粘土もブロック状に含まれていることから、中世の整地土層と考えられた。

その下に、調査区全域に、南北方向に轍が多数検出された（図版10b）。轍は、よく分かる例

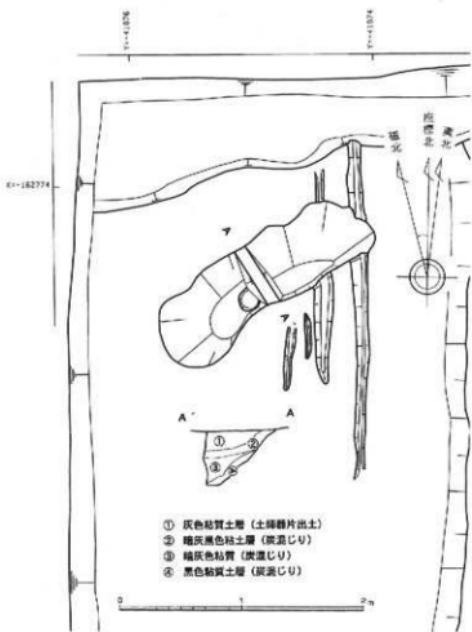


第7図 4区遺構平面図

では、幅145cm・150cmのものが認められた。轍の幅は、断面逆台形で、残り具合にもよるが、上面で8cm~15cm~20cmと様々であった。底面は、よく残っている例では幅3cmのものがあり、車輪の幅と推定された。轍間には、幅20~30cm位の楕円形の穴や牛の足跡が多数残っていた。やや固めの地山層である茶褐色粘土層上に、灰色粘土が落ち込んでおり、深いものでは、25cmに達するものもあった(図版11a)。地面が濡れて軟らかくなっている時に、相当の重量物を幾度も幾度も運んでいたものと考えられた(第7図)。

4区の西端部分で、長さ200cm幅60cm深さ50cmの長楕円形を呈する土坑が検出された(図版11b)。この土坑は、その埋った上面が2本の轍によって切られており、鎌倉時代と推定できる轍よりは古い時代のものと考えられた。埋土は、4層に分かれ、上から2層目と4層目が炭混じりの黒色粘土層であった。2層目から、土師器細片が出土した。この土師器は、椀の口縁部で、細片のため確かでないが、平安時代頃のものと考えられた(図版16a)。この土坑の底は、南ほど深くなっていて、北側が浅くなっていた。単独で検出されたこの土坑の性格は、墓かと推定されるが、底の形状の特異性から、他の用途を考えねばならないのかも知れない(第8図)。

中世遺物包含層に含まれている遺物には、旧石器時代のサヌカイト剥片、古墳時代後期の須恵器杯・甕・壺、鎌倉時代の瓦器椀・小皿、土師器甕・杯・小皿・



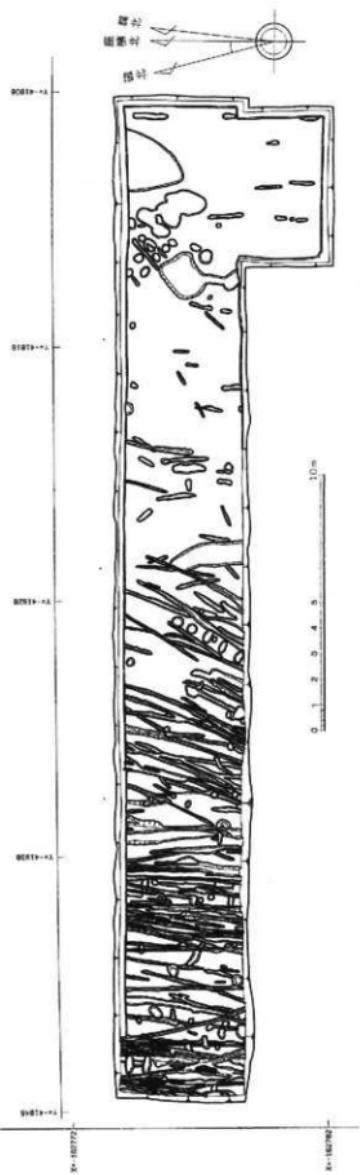
第8図 4区土坑平面図・断面図

り西の部分では、同層中に2枚の厚さ2~3cmの酸化鉄の沈積層が認められるのに対し(図版15b)、東側では、一枚だけであった(図版15a)。5区の西端と東端では、地山面において、20cmの高低差が認められる訳であるが、この16m付近で、西と東の田の高さが異なる境目が中世の段階でも作られていたことが判明した。ただし、最下層の整地層である暗灰褐色粘質土層は、調査区の西と東で、緩やかに西が高く東が低く下がっていて、16m付近でも顕著な段差は認められなかった。地山を削って、平坦にする際も、それ程、旧地形を大きくは削っていないかった様子である。

5区の西端から20m付近までは、中世の整地層を除去すると、一面に牛車の轍が南北方向に検出された(図版12a)。轍は、幅10~30cmまでと残りによって異なり、深さも2~3cmの浅いものから、30cmに達する深いものまで、様々であった(図版13a)。また、同一の轍であっても南北の部分部分でも異なっていた。要は、地山である黄褐色の粘土層が降雨や湧水によって軟らかくなっていたところに、重い牛車が進入したために、轍がついてしまったものである。地山のその時の固さによって深浅の違いができるのである。轍は、多い所では、1m幅に5本がついていた所もあった(図版13b)。轍の方向は、ほとんどが南北のものばかりであるが、中に斜めに走っているものもあり、それによって、牛車の車輪幅を推定できるものがあった。幅1.45mと

羽釜・鍋・皿、東播須恵器ねり鉢、丸瓦、青磁碗、白磁碗などがあった(計89点)。

《5区》 5区は、東西方向に伸びる長さ39mの長い調査区である(図版4)。この調査区の西端から16m東までは、府営住宅建造時の盛土が厚さ45cmと浅く、それより東では60cmと厚くなっていた。近世~近代にかけての旧耕土層である暗灰色粘質土層も16mを境として、一段(15cm)東側に下がっていた。16m部分には、旧耕土層によって、高さ8cm幅80cmの大きな畦が作られていた。畦を境に西と東の田の高さが異なっていた訳である。その違いは、中世の水田耕土層と考えられる厚さ30~35cmの灰褐色~灰黃褐色の粘質土層(中世土器包含層)でも顕著だった。畦よ



第9図 5区・6区遺構平面図

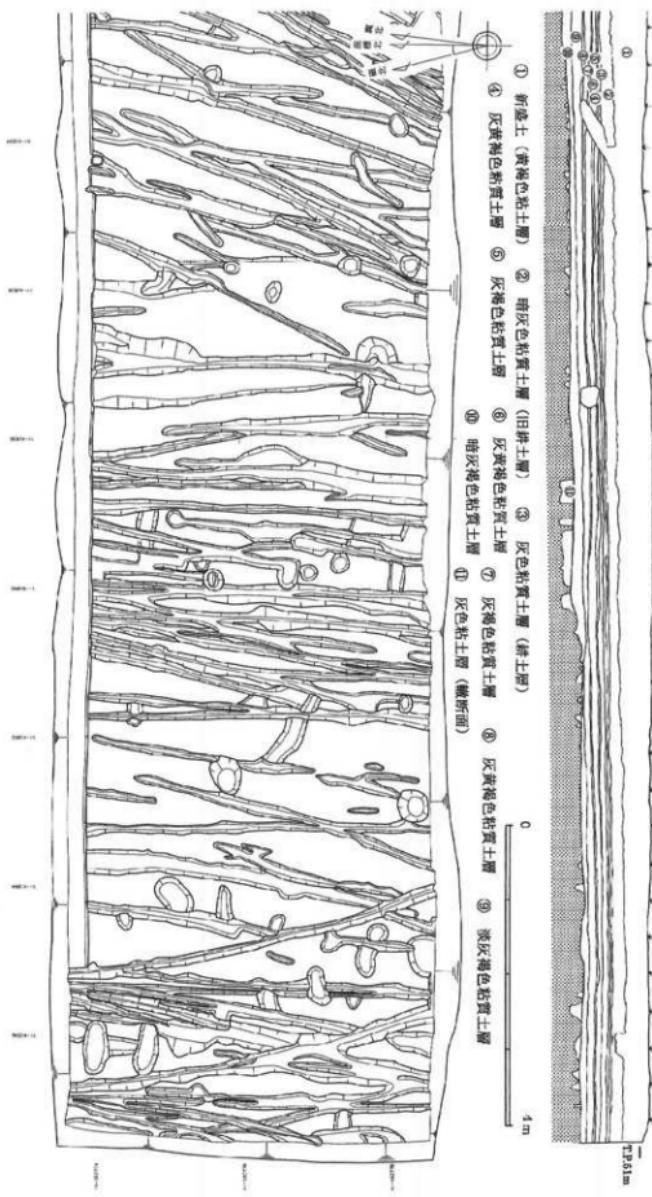
1.50mの2種類は確認できた。轍の中には、多数の牛の足跡が残っていた。足跡と共に、長さ40~50cm幅25cm程度の楕円形の穴も多数検出された(第9・10図)。その方向は、轍の方向に対し90度の角度をもっているのが多かった。埋土は、牛の足跡や轍と同じ灰色粘土であった。轍の断面は、逆台形を呈し、灰色粘土は当時の泥と考えられた(図版14a)。

5区の西端から東に4~5mの間に、南北方向に2.4m隔てて、2つの円形ピットが検出された。径約40cmのピット2つで、深さは20cmと40cmであった。埋土は、よく締まった暗灰褐色粘土で、土師器片が包含されていた。轍によって、埋土上面が切られていることにより、轍以前の遺構であることは明らかであった。この大きなピット2つは、東西で対になるものなどが検出されなかったことにより、柵列でもあったものかと考えられた。土師器は、皿と考えられるが、細片のため時期は分からぬ。

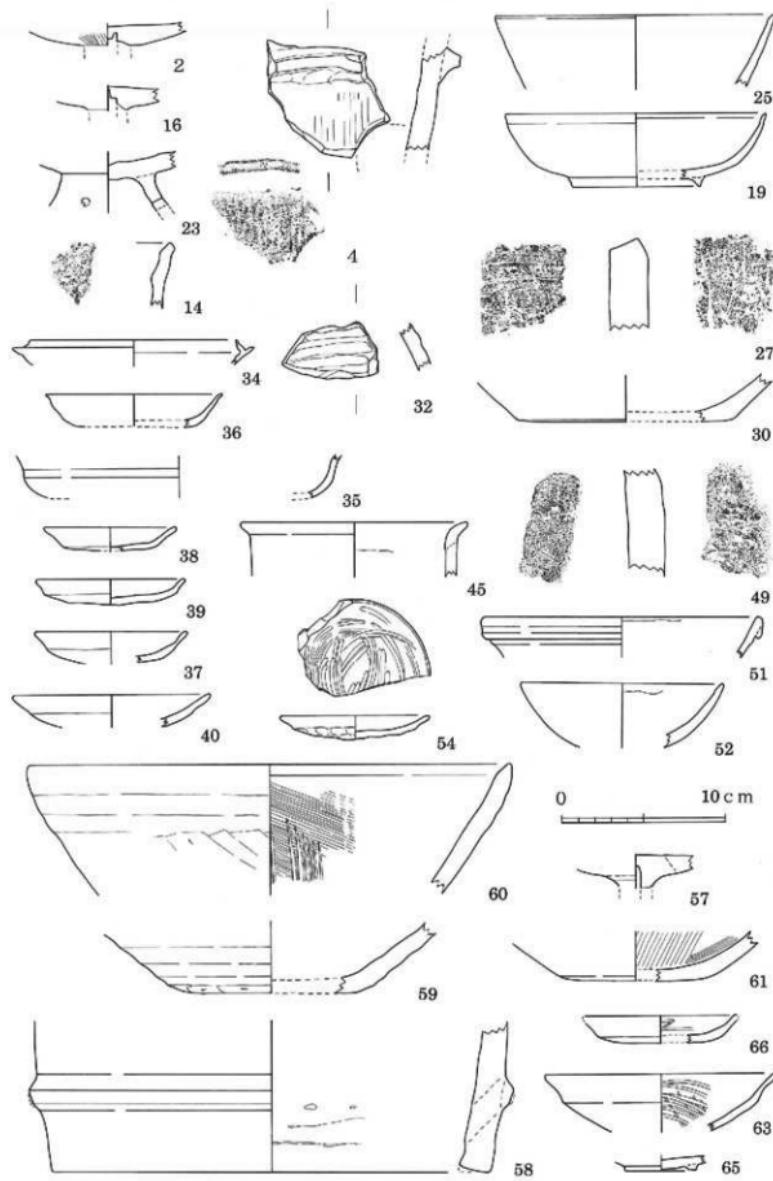
5区の西端から10m東の部分の轍の埋土からは、古墳時代中期の円筒埴輪片が1点出土した。縦ハケ一次調整の円筒埴輪で、タガ・透かし穴が認められた(図版16a)。

5区の東端30~38m付近では、轍と共に、不整形な楕円や隅丸方形の土坑状の落ち込みが集中して検出された(図版12b)。灰色粘土が浅く落ち込んでいたが、遺物は出土しなかった。大小様々な土坑の性格は不明である(図版14b)。

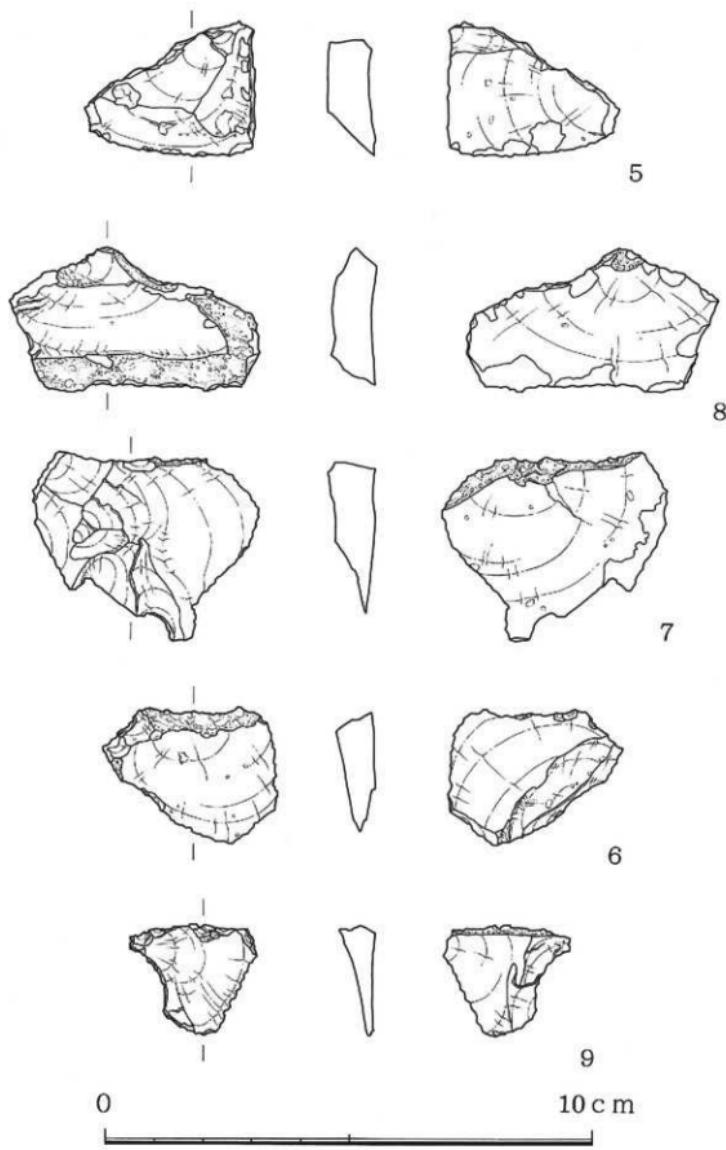
中世遺物包含層に含まれている遺物には、旧石器時代のサヌカイト剝片、古墳時代中期の土師器高杯、古墳時代後期の須恵器杯・壺・壺、鎌倉時代の瓦器碗・小皿、土師器羽釜・杯、東播須恵器ねり鉢、南北朝~室町時代の須恵器すり鉢、土師器すり鉢・壺などがあった(計56点)。



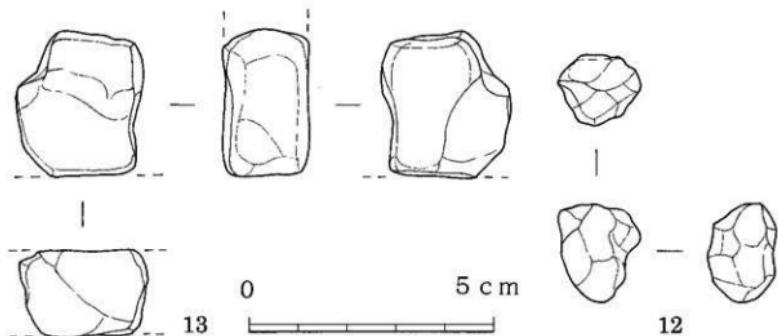
第10図 5区南端遺構平面図・断面図



第11図 出土土器・埴輪・瓦実測図



第12図 出土石器実測図



第13図 出土土製鋳型・鉄塊実測図

（6区） 6区は、5区の東端の南側に接する長さ5mの短い調査区である（図版4b）。層序は、5区と同じである。南北方向に、動溝が部分的に検出されたのみである。ただ、東端壁面中に、地山直上の暗灰褐色粘質土層（整地土層）中から、古墳時代中期の円筒埴輪片が出土した。鎌倉時代と推定される整地層中に含まれていたということは、整地が近辺で行われた際に、古墳が削平されていた可能性も考えられた。

中世遺物包含層に含まれている遺物には、旧石器時代のサヌカイト剥片、古墳時代後期の須恵器甕、鎌倉時代の瓦器椀・小皿、土師器羽釜・鍋・杯、南北朝～室町時代の火舎などがあった（計30点）。

《轍》 今回の調査で、多数の轍が検出された。特に、4区や5区では集中していた。これらの轍は、調査区各所から検出されたため、かっての道路上に残っていたものが、たまたま検出されたものとは考えられなかった。轍の残っている幅は広く、広いグラウンドのような場所を何台もの牛車が主として南北方向に往来していた状況が復元された。これらの轍は、埋土から5区で円筒埴輪や土師器細片が出土したのみで、直接的に時代決定できる遺物は出土していない。ところが、轍をその上層の整地土層堆積に伴う土木工事の際にいたものと考えると、鎌倉時代のものと推定できる。牛車で土を運んだ例は、14世紀後半の『石山寺縁起』一巻にも掲載されていて、京都付近では、土木建築の仕事にすいぶん牛車が利用されていたようである。余部遺跡では、従前の調査でも各地区で轍が検出されていて、それぞれ遺物が出土していないことから、遺構の切り合い関係によって、古墳時代後期以降中世以前のものと考えられてきた。

一方で、余部遺跡の一帯には、条里制の痕跡が明確に残っていることも、早くから指摘されている（『美原町史』第一巻、平成11年）。条里地割の施工が土地の起伏を平坦にし、耕地や農道・水路を整備する工事であることからすると、この工事に伴って地面上に残ってしまった痕跡がこの轍と考えることが可能である。轍が、それぞれの調査区の地山直上に検出されるのは、土地の削平によって、できあがった新鮮面に最初に痕跡をつけたのが、牛および牛車の轍で、その上に耕

第1表 出土遺物一覧表

遺物番号	図版番号	種図番号	遺物名	時期	出土位置
1	図版16 a		土師器蓋	古墳前期	1区井戸
2	"	第11図	土師器高杯	"	"
3	"		土師器杯	平安?	4区土壇
4	"	第11図	円筒埴輪	古墳中期	5区壁
5	図版16 b	第12図	サヌカイト翼状剥片	旧石器	3区包含層
6	"	"	サヌカイト剥片	"	1区包含層
7	"	"	"	"	4区包含層
8	"	"	"	"	5区包含層
9	"	"	"	"	6区包含層
10	"		フイヨ洞口	鍵盒?	2区包含層
11	"		"	"	3区包含層
12	"	第13図	鉄塊	"	"
13	"	"	土製鎧型	"	1区排土中
14	"	第11図	製埴土器	奈良	1区包含層
15	図版17 a		布留式蓋	古墳前期	"
16	"	第11図	土師器高杯	"	"
17	"		土師器杯	奈良	"
18	"		土師器羽釜	"	"
19	"	第11図	黒色土器胸	平安中期	"
20	"		束縛繩	鍵盒	"
21	図版17 b		須恵器蓋	古墳後期	"
22	"		"	"	"
23	"	第11図	"	"	"
24	"		須恵器杯	"	"
25	"	第11図	"	奈良	"
26	"		須恵器蓋	"	"
27	"	第11図	平瓦	"	"
28	図版18 a		須恵器蓋	"	2区包含層
29	"		束縛ねり鉢	鍵盒	"
30	"	第11図	土師器蓋	南北朝~室町	"
31	"		土師器すり鉢	"	"
32	"	第11図	瓦質羽釜	"	"
33	"		平瓦	"	"
34	図版18 b	第11図	須恵器杯	古墳後期	3区包含層
35	"	"	土師器杯	奈良	"
36	"	"	"	"	"
37	"	"	土師器小皿	鍵盒	"
38	"	"	"	"	"
39	"	"	"	"	"
40	"	"	"	"	"
41	図版19 a		須恵器蓋	古墳後期	"
42	"		須恵器杯	"	"
43	"		須恵器蓋	"	"
44	"		"	"	"
45	"	第11図	土師器鉢	奈良?	"
46	"		土師器羽釜	奈良	"
47	"		瓦質羽釜	鍵盒	"
48	"		平瓦	"	"
49	"	第11図	"	"	"
50	図版19 b		須恵器振瓶	古墳後期	4区包含層
51	"	第11図	白絞繩	平安末期	"
52	"	"	青絞繩	鍵盒	"
53	"		束縛ねり鉢	"	"
54	"	第11図	瓦質小皿	"	"
55	"		七師器羽釜	"	"
56	"		土師器鉢	"	"
57	図版20 a	第11図	土師器高杯	古墳中期	5区包含層
58	"	"	円筒埴輪	"	"
59	"	"	束縛ねり鉢	鍵盒	"
60	"	"	土師器すり鉢	南北朝~室町	"
61	"	"	須恵器すり鉢	"	"
62	図版20 b		須恵器蓋	古墳後期	6区包含層
63	"	第11図	瓦質楕	鍵盒	"
64	"	"	"	"	"
65	"	第11図	"	"	"
66	"	"	瓦質小皿	"	"
67	"		土師器羽釜	"	"
68	"		瓦質鉢	南北朝~室町	"

土等が置かれてしまったため、そのまま埋没してしまったものと考えられた。条里工事の施工に伴い、掘削土小運搬に牛車が多用された結果を示す遺構と考えられた。ぬかるむ地面に足を取られながらも所定の工期に間に合わせるため、必死になって牛と工事している作業風景が想像された。

## 第4章　まとめ

今回の発掘調査の結果、多数の遺構・遺物が発見された。

- 1区で、古墳時代前期以降鎌倉時代以前の井戸を検出した。素掘りであった。
- 2区で、奈良時代の土師器・須恵器を包含する層を検出した。近くに、「丹比郡余部郷」の存在が推定された。
- 3区・4区・5区で、鎌倉時代以前の時期の遺構（土坑・ピット）を検出した。
- 4区・1区・3区・4区・5区で鎌倉時代の牛車および牛の足跡を多数検出した。牛車は条里工事の際、土を盛んに運んでいたと推定された。
- 5区で、中世遺物包含層を検出した。
- 6区出土遺物には、旧石器時代の翼状剥片、古墳時代前期の土師器、古墳時代中期～後期の円筒埴輪・須恵器、奈良・平安時代の須恵器・土師器・製塩土器・瓦、平安時代末期～鎌倉時代の瓦器・土師器などがあった（第11・12図）。
- 7区出土遺物には、土製鋳型・ワゴンの羽口・鉄塊などがあった（第13図）。

# 写 真 図 版



a, 調査区遠景（東上空から）

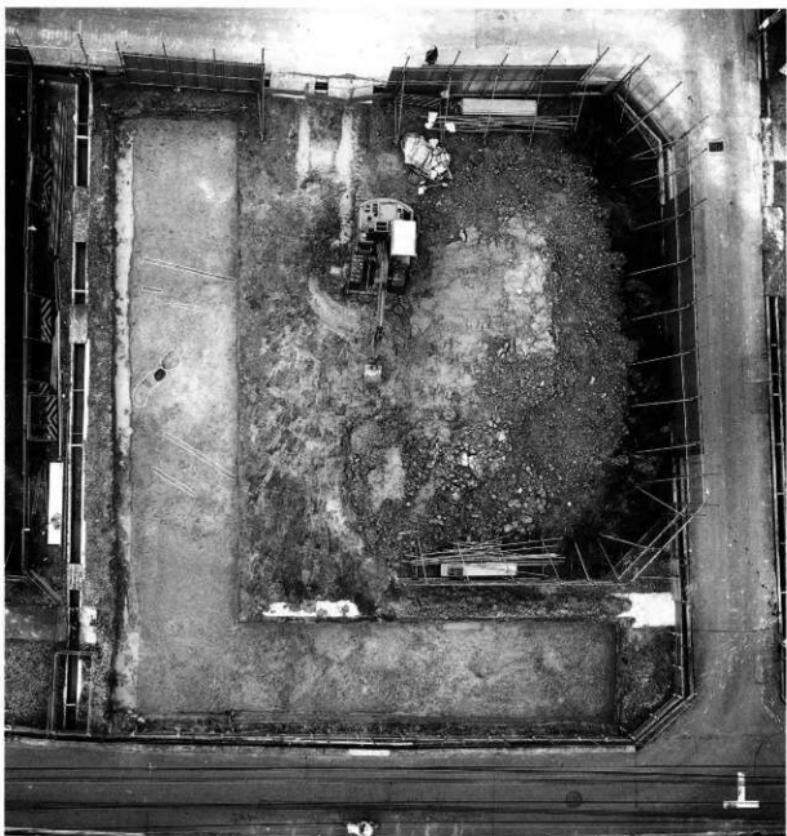


b, 調査区全景（北上空から）



a, 1区南半部全景(下が北)

b, 1区北半部全景(下が北)



a, 2区・3区全景（上が東）



b, 4区全景（右が東）



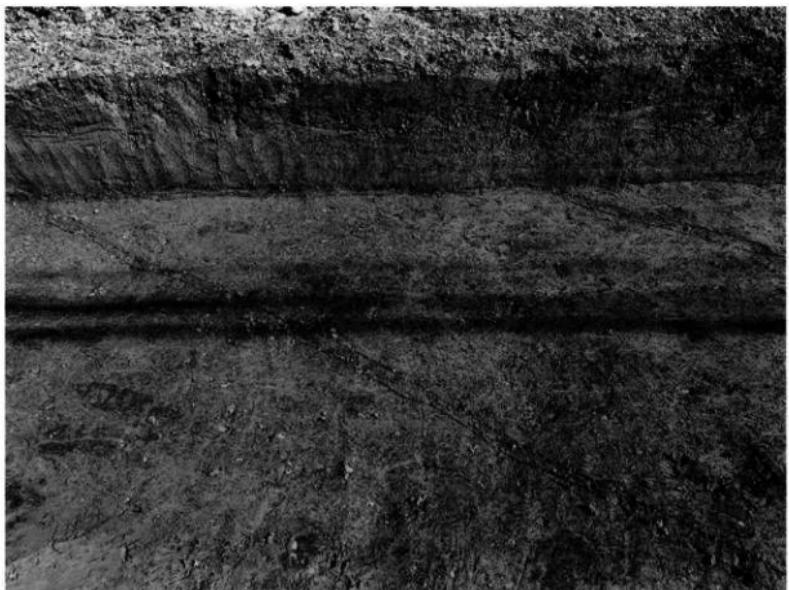
a, 5区全景（上が東）



b, 5区・6区全景（上が東）



a, 1区轍検出状況（南から）



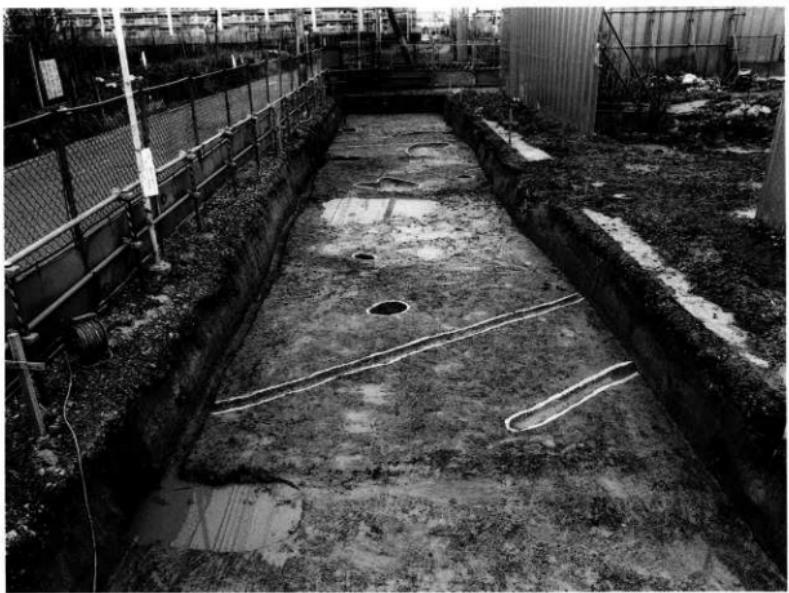
b, 1区轍・牛の足跡検出状況（西から）



a, 1区南半部全景（北から）



b, 1区北半部全景（南から）



a, 1区北端全景（南から）



b, 1区北端全景（北から）



a, 1区井戸検出状況（南西から）



b, 1区井戸全景（西から）



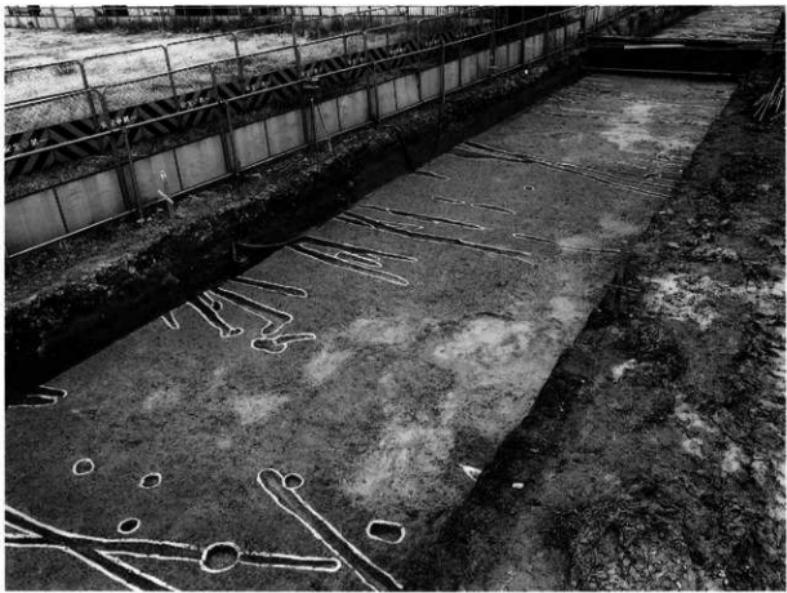
a, 2区全景（北から）



b, 3区全景（東から）



a, 3区輶・土坑検出状況（南西から）



b, 4区全景（南西から）



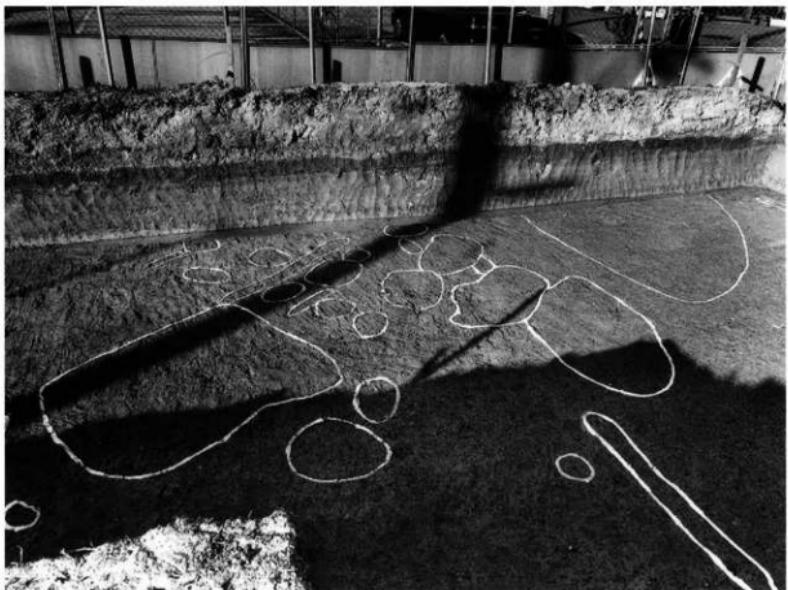
a, 4区西端濠・土坑・ピット検出状況（南から）



b, 4区西端土坑（東から）



a, 5区軸・ピット検出状況（西から）



b, 5区東端土坑・ピット・轍検出状況（南から）



a, 5区全景（南西から）



b, 5区概・ピット（西から）



a, 5区西端轍・ピット（東から）



b, 5区東端・6区土坑・ピット（北西から）



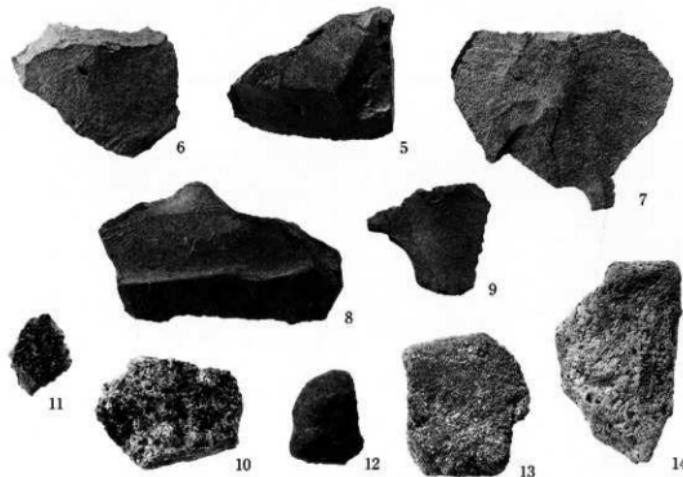
a, 5区南壁断面（北東から）



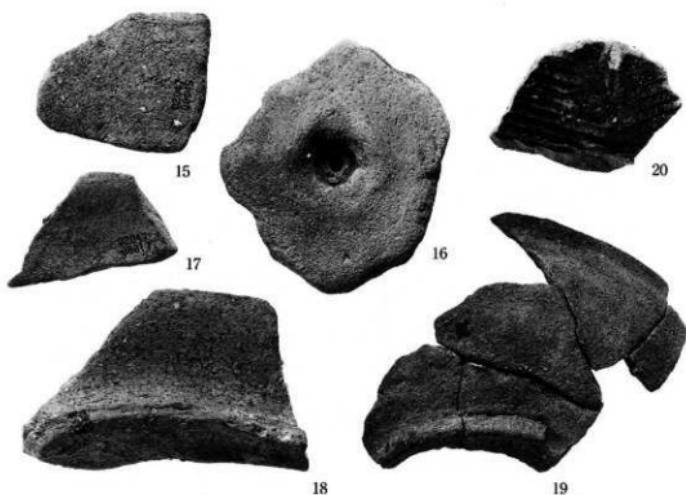
b, 5区南壁断面（北西から）



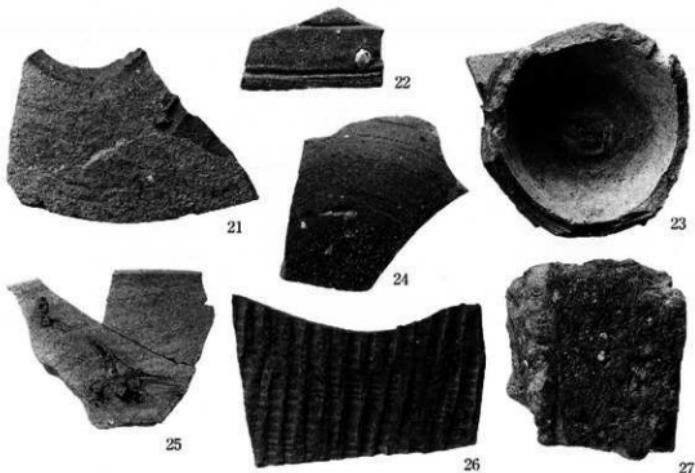
a, 1区井戸。土師器壺 (1)・高杯 (2)。4区土坑。土師器杯 (3)。5区轍。円筒埴輪 (4) (1/1)



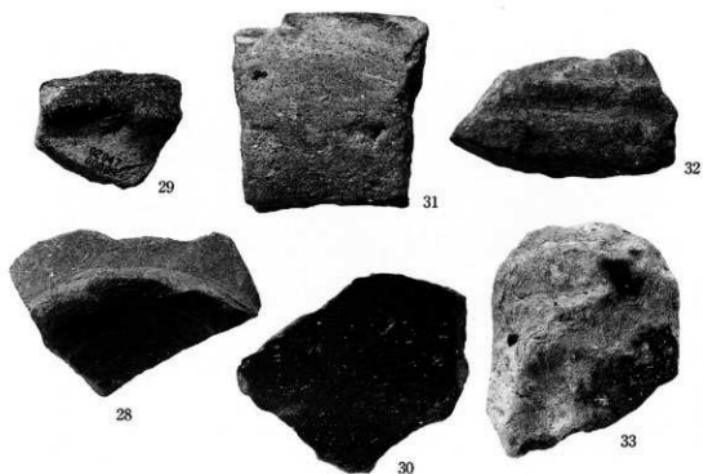
b, 各区包含層。翼状片 (5)、サヌカイト片 (6~9)、フイゴ羽口 (10~11)、鉄塊 (12)、鋳型 (13)、製塩土器 (14) (1/1)



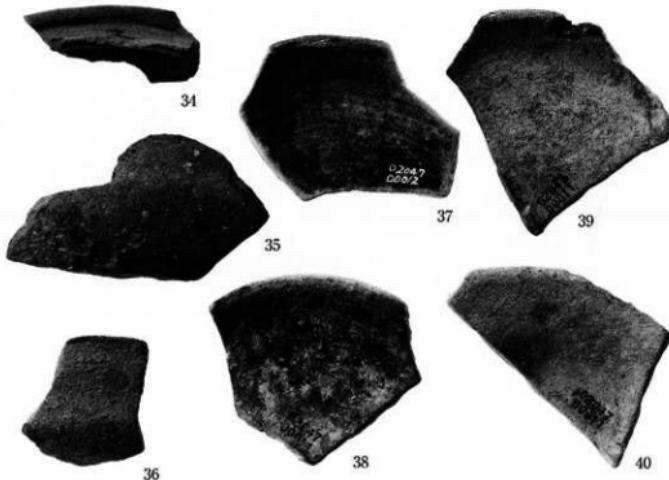
a, 1区包含層。布留式壺 (15)、土師器高杯 (16)・杯 (17)・羽釜 (18)、黑色土器椀 (19)、束擂壺 (20) (4/5)



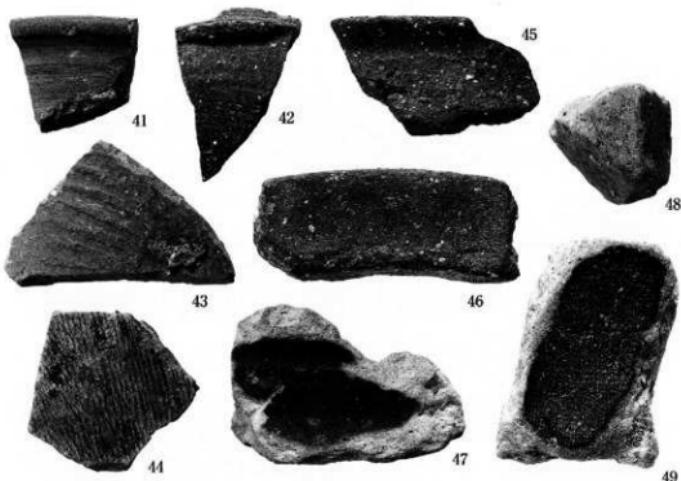
b, 1区包含層。須恵器壺 (21~23)・杯 (24~25)・壺 (26)、平瓦 (27) (2/3)



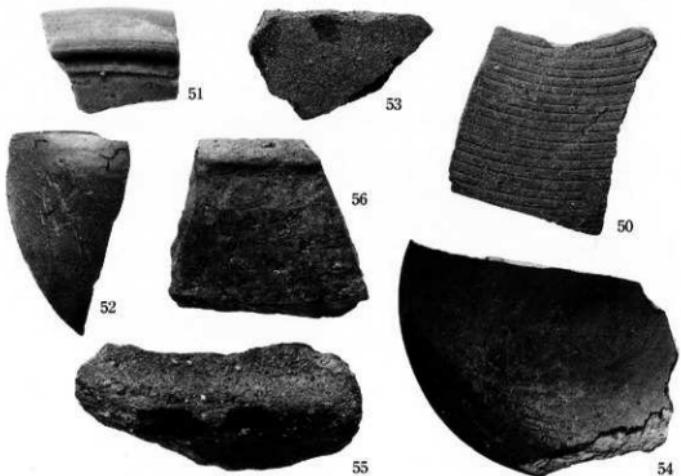
a, 2区包含層。須恵器壺 (28)・束縛ねり鉢 (29)、土師器壺 (30)・すり鉢 (31)、瓦質羽釜 (32)、平瓦 (33) (4/5)



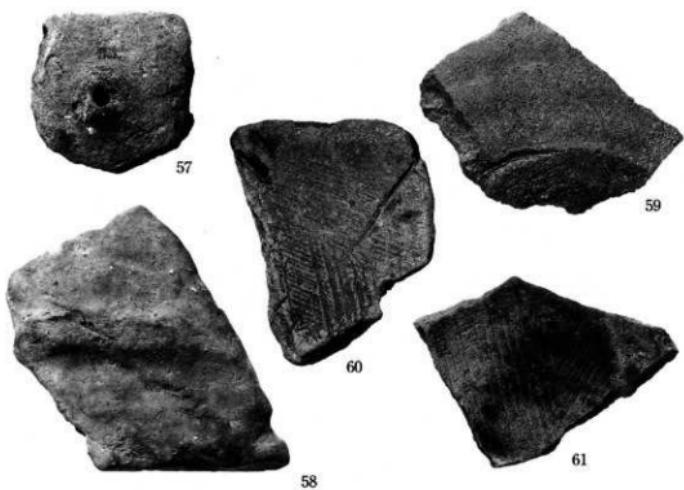
b, 3区包含層。須恵器杯 (34)、土師器杯 (35・36)・小皿 (37~40) (1/1)



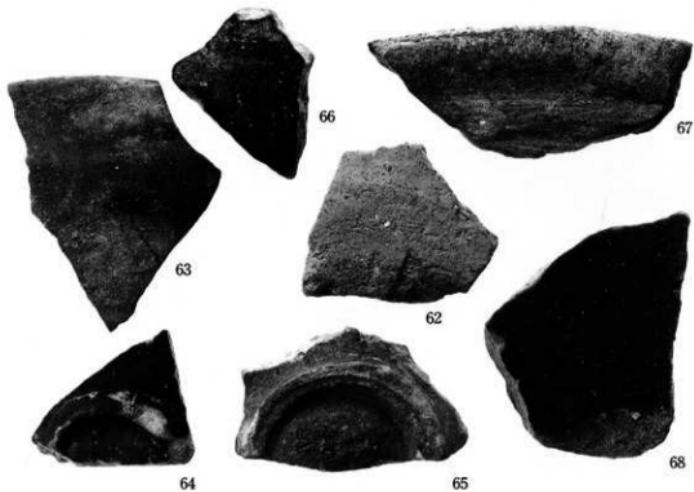
a, 3区包含層。須恵器鉢 (41)・杯 (42)・壺 (43・44)、土師器鉢 (45)・羽釜 (46)、瓦質羽釜 (47)、平瓦 (48・49) (2/3)



b, 4区包含層。須恵器提瓶 (50)、白磁碗 (51)、青磁碗 (52)、東播ねり鉢 (53)、瓦器小皿 (54)、土師器羽釜 (55)、鍋 (56) (4/5)



a, 5区包含層。土師器高杯 (57)、円筒埴輪 (58)、束播ねり鉢 (59)、土師器すり鉢 (60)、須恵器すり鉢 (61) (2/3)



b, 6区包含層。須恵器壺 (62)、瓦器碗 (63~65)・小皿 (66)、土師器羽釜 (67)、瓦質鉢 (68) (1/1)

# 報告書抄録

ふりがな	あまべいせきさん							
書名	余部遺跡Ⅲ							
副書名								
巻次								
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	2003-1							
編著者名	西口陽一							
発行機関	大阪府教育委員会							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 Tel.06(6941)0351(代)							
発行年月日	平成16年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
あまべいせき 余部遺跡	おおさかしゆみみなみかわち 大阪府南河内 くにいわこうじようちみなみあま 郡美原町南余 部	27385	18	34° 31' 42"	135° 32' 46"	平成15年1月～ 平成15年3月	875	府営美原南余部 住宅道路整備工 事に伴う調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
余部遺跡	集落遺跡	鎌倉時代	櫛、土坑、 ピット、井戸	翼状剥片、円筒埴輪、須恵器、土師器、瓦器、白磁、青磁、土製鉢型、フイゴ羽口、鐵塊	鋳造関連遺物が出土。多数の牛車の轍や牛の足跡を検出。			

大阪府埋蔵文化財調査報告2003-1  
余部 遺跡 III

発行年月日 2004年3月31日  
編集・発行 大阪府教育委員会  
〒540-8571  
大阪市中央区大手前2丁目  
TEL 06-6941-0351（代）  
印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所  
〒537-0002  
大阪市東成区深江南2丁目6番8号  
TEL 06-6976-8761（代）

